温故写新

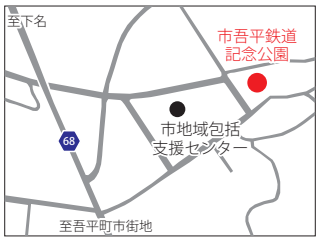
写真で見る「かのや」の今・昔

国鉄大隅線吾平駅

昔　昭和40～50年代

今

多いときには1日平均600人以上の人が乗り降りしていた吾平駅。しかし、自家用車の増加によって通勤手段はマイカーへと移り変わり、昭和32年から昭和62年の大隅線廃止まで、利用者数は減少の一途をたどっていきました。公園に姿を変えた現在でも一部の線路などが残っており、当時の思い出に触れることができます。



カノヤ タイム トラベル

昔、鹿屋で起きた出来事にクローズアップ！

大姶良の人々を虜にした早馬（はやま）

藩政時代の頃まで、旧大姶良村では「春は馬追（うまおい）と早馬、秋は流鏑馬（やぶさめ）と競馬」といわれるほど馬術が盛んに行われており、なかでも早馬は、産馬奨励や乗馬訓練、娯楽の一環として、明治30年頃まで盛大に行われていました。

早馬とは自慢の馬を出し合い競走させる草競馬の一種。馬の走路となる馬場は、獅子目、大姶良の神田原、横山、南の楠原、西俣の日出神、永野田、野里の芝原上の7か所に設けられていました。馬場の長さは約110m～180m程で、主に神社前の街道などを利用。多いときには50～60頭の馬が早馬に集まっていたといいます。

早馬が行われるときには、地域住民は家族総出で、親類や知人が一か所に座席を構え、飲食をしながら見物するのが何よりの楽しみでした。ときには数千人の見物客が訪れることもあるなど大いににぎわい、馬場の付近一帯にはコンペイトウやカライモアメなどの出店が立ち並び、小遣い銭で買い物をするのも楽しみの一つでした。

しかし、明治以後は初期の目的から逸脱して、遊楽と虚栄に走り単なる酒飲みの道具に成り果ててしまいます。三味線や太鼓に歌踊りなどの酒宴が夜まで続き、なかには勤労を怠り、風俗を乱し、馬を買うために田地を売り飛ばす者も現れるようになりました。

このような状態から早馬乗りのことを「田乗り」といったり、田一反と馬一頭が同価格であったことから「ハイハイチェスト、田一反ハイヨー」と当時の世相を皮肉った歌も歌われるなど、早馬は住民の生活や人生に大きな影響を及ぼしました。

家畜の安全を願う神様が祀（まつ）られている早馬神社（横山町）では、旧暦の3月3日に早馬が行われていたという。